
ooo after ~夜天の主と欲望の王~

a-o-w

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ooo after ~夜天の主と欲望の王~

【NZコード】

N7376Z

【作者名】

a - o - w

【あらすじ】

今までずっと一緒に戦ってきた『腕』と
再び再開するため旅を続けている

無欲な青年、「火野 映司」が旅の途中でたどり着いたのは、
魔法文化が発達した世界、「ミッドルダ」だった。

そこで映司は「4人の守護騎士」と、
「夜天の主」に出会い、

とある事件に巻き込まれていく…。

～夜天の主と欲望の王～（前書き）

今回初めての小説の投稿です。

はつきりいつて文章力と国語力は〇に等しいです。なるべく見てくださる皆様にわかつてもらえるよう努力していきますのでよろしくお願いします。

あとスマホでの投稿なので途中 ん？ となる
ことがあるかもしれません。

ご了承ください。

私の完全な自己満足な小説なので完成度は
あまり期待しないでください。

あと小説を見て、気分が悪くなつた方は
閲覧をやめてください。文句、クレームも
一切受け付けません。

～夜天の主と欲望の王～

暗い森の中、

少し変わった格好をした

20代ぐらいの青年が歩いていた。

？？？「はあ…はあ… 完全に迷ったなあ、携帯は繋がらないし、
ここがどこなのかわからなーいし、はあ…」

その青年は旅をしている。

一緒に戦ってきたかけがえのない『腕』を探すために。

？？？「…まあ、まあなんとかなるでしょ、なんにも持っていないけど、
明日の『パンツ』はちゃんとあるし！」

青年はまた再び歩き始めた。先の見えない旅の出口を瞄して…

彼、青年の名は - 火野 映司 -

またの名を、『仮面ライダーオーズ』

001話 世界の破壊者とパンツと異世界

映司「…結構歩いたなあ、でもいくら歩いても木ばかりだなあ」

無欲な青年、火野 映司 は、いまだに森をさまよい歩き続けていた。

映司「お～い、誰かあ！ いませんかあ～！？
助けてくださいあ～い！！ … いるわけないか、
… 困ったな、お前だつたらどうする？」

… - アンク -

映司はポケットから2つに割れた『メダル』を取りだし、悲しげな顔をしてそれを見つめる…。

映司「お前がいなくなつてから、毎日が寂しいよ、アンク。いままでお前を復活させるため、いろいろな国を旅してきたけど何一つ手がかりがなかつたよ…、なんかもう、やつぱり無理なのかな…」

その時、いきなり木から果物が落ちてきて、映司の頭に…、

- ゴンツ！ -

映司「…ツ！ いつてええエエエ…！」

見事 ハイ した。

映司「…ははッ！ そうだよな、俺、何弱気になつてるんだ？」「ごめんアンク！ まだ俺諦めないから！ 絶対お前を見つけて出すから！」

映司は空に向かつて叫びだした。

「必ず、お前を、見つけ出すからあッ！…！」

叫び終わつた後、映司は落ちてきて果物を手に取り、食べながら歩き出す。

映司「よし、頑張つてこの森から抜けだすぞ…次はこっちにいつて『おい、オーズ…』…ん？ だ、誰！？」

どこからか、声が聞こえてきた。

？？？」「うひちだ、うしろだ。」

映司「うしろ？…あ！ あなたは！？」

そこに立つていたのは、

かつて「世界の破壊者」と言われた者、『仮面ライダー』ディケイド』だった。

映司「お久しぶりです！ ディケイドさん！ ショックカーの件以来ですね！」

ディケイド「ディケイド『せん』つてお前… まったくお前を呼びに『この世界』に来てみれば、お前こんなどころで何してるんだ？」

映司「いや～旅してたら道に迷つちゃって、ははッ！……ん？俺を呼びに来たってどういう意味なんですか？」

その場の空気が一気に変わった。

ディケイド「いいか、よく聞けオーブ…、お前はこれからある世界に行つてもらう、そしてお前には『ある事件』を解決してもらひ、悪いがこれは『オーブ』にしかできないことだ、だいたいわかつたな？」

映司「『だいたいわかつたな？』… つて全然わからないですよ！ 体なにがどうなつてるんですか！？ だいいち、俺はもうオーブには…」

ディケイド「よし、よくわかつてくれた、この世界のためにせいぜい死なない程度に頑張つてきてくれ、じゃあな。」

突如、映司の前に灰色のオーロラのカーテンが現れ、迫つてくる…。

映司「ちょっとお！ 全然話聞いてないじゃないですかあ…ま、まつて、ああああああああああああああ…」

映司は完全にこの世界から消え去つた。

ディケイド「すまない、オーブ…、さすがに無理矢理すぎたが、本当にお前にしかできないことなんだ…。

頼むぞ、『仮面ライダーオーブ』」

森には再び静寂になつた…。

？？？「はやでちやん……」

？？？「ん？どうにした？」

リイン「窓か？、ぱ、ぱ……。」

はやで「ぱ、

リイン「パ、パンツが
落ちてきたんですね！――！」

はやで「…………は、？」

映司「……つ痛で、なにが起ったんだ？」

映司は辺りを見回す。そこには見たことのない建物の廃墟が一面に広がっていた。

映司「……え、え？えええええ！？！？」

- - - 物語は始まつた。

時はさかのぼり、ミッドチルダ

機動6課隊舎

ブリーフィングルームにて会議が行われていた。

そこにいたのは

機動6課部隊長「八神はやで」

スターズ隊長「高町なのは」

ライトニング隊長

「フェイト・T・ハラオウン」

の、3人だった。

なのは「はやてちゃん、それで話つて?」

はやて「えつとな、ついこの前の前のことなんやけども、ミッドチルダ市街地で殺害事件があつたんや。で、目撃者の話によると、『怪物に襲われた』つていう証言なんよ」

「ヒイト」でも「アシド」で「怪物」なんて……

はやて「うふ、一度も確認された事はないんよ、と、いうことは、別の世界から来たとしか考えられへん。」

なのは「待つて、でも、管理局のデータベースには……」

はやて「さう、そこや、なのはちゃん。時空管理局に引っかからず、ミッドチルダに次元移動なんてまず無理なんよ。と、いうこ

とは、最初からこの世界にいた、ところとなるんだよ

フュイト「うー、そんなー？」

はやて「まあ、フュイトちゃんが驚くのも無理もないなあ、とにかく

この事件は私とヴォルケンリッターが主体となつて動きます。事によつてはフォワードと隊長陣も動くことになるかもしないので頭に入れといへください。」

なのは&アム・フュイト「了解！」

- 隊舎 廊下 -

なのは と はやてが歩きながら雑談していた。

なのは「それにしても大変だよね、JS事件が片付いて一段落した
と思つたら次から次へと事件が押し掛けてきて、
はやてちゃん、体大丈夫？」

はやて「なのはちゃんにそれ言われる日がくるとわなあ…。」

なのは「なのはは、でも例の事件、はやてちゃんとシグナムさん、
それとヴィータちゃんにシャマル先生とザフィーラさん達だけで動
くつてことでしょ？未確認の生物相手にたつた数人でつて、いくら
なんでも危険なんじや…」

はやて「大丈夫、心配あらへんよ」

はやては胸をはって言った。

はやて「なんてったって私は歩くロストロギア、『夜天の主』である子達は私を守る守護騎士たちや、なんの問題なんてあらへん！」

なのは「やつか、わかった！でもくれぐれも無茶だけはしないでね。

」

はやて「ありがとう、なのはちゃん。で、そろそろあの子達にも説明しておかんと、またね！なのはちゃん！」

なのは「じゃあねーはやてちゃん！」

それからしばらく時間がたち、はやての周りにはヴォルケンリッター全員が集められていた。

烈火の将 剣の騎士 シグナム

紅の鉄騎 鉄槌の騎士 ヴィータ

風の癒し手 湖の騎士 シヤマル

蒼き狼 鉄壁の守護獣 ザフィーラ

それと、今は亡き『祝福の風』の名を受け継ぐもの、リインフォース？

はやて「…と、こう」となんや。嘘、わかった？」

シグナム「主、はやて 確認されている怪物とこののはその一体だけなのですか？」

はやて「せや、だけどくれぐれも気を抜いちゃだめや、もしかしたら増援もあり得るからなあ」

「ヴィータ「まあその怪物を取つ捕まえて全部吐かせつやそれで事件解決つて事だな！」

シャマル「いや、ヴィータちゃん。女の子がそんな汚い言葉遣いしちゃ駄目でしょ！」

ザフィーラ「シャマル、突つ込むところが色々と違うだ。…主、基本はシャマルと隊舎で待機という形で良いのだな？」

はやて「せや、基本は私とシグナムとヴィータが前線にて、シャマルとザフィーラは待機や、あーりインもな！」

リイン「了解ですぅ！」

はやて「それじゃあ皆、気合いこいで、任務、開始！」

ヴォルケンズ「了解！」

それからまた月日がたち、現在、シグナムとヴィータがパトロールをしていた。

ヴィータ「なあ、シグナム」「

シグナム「なんだ、ヴィータ」

ヴィータ「こんなところに未確認なんか現れるのかよ~」

シグナム「一様確認だ、まあ人は住んでいないがな」

今パトロールしている場所はかつてジェイル・スカリエッティのガジェットドローンと交戦があつた市街地である。今はとても人が住める場所ではない。

シグナム「前に報告があつた件以来、一度も事件が起きないのも奇妙だ。できれば機動6課が解隊になる前に解決したかったのだが」

ヴィータ「そつか、試験運用期間も残り数週間だもんな、あいつらもだいぶ成長し『ええええええええ!?』、な、シグナム!」

シグナム「悲鳴というより驚き声に聞こえたが、いくぞ!ヴィータ!」

二人は急いで悲鳴?が聞こえた現場に向かつた。

その頃…

映司「ちょっと待てよ…」「…ど…!…ま、待て、落ち着こい、そつだ、落ち着いて、えつと…」

ヴィータ「なんだ、一般市民か、こんなところでなにしてんだ?」

タイミングよくヴィータが空から降りてきた。

ヴィータ「なー?」「スプレジやねえー!」これは はやてが作ってくれた……

ヴィータ「おー! 話を聞きやがれ! 殺すぞ! 」

シグナム「何をしているー?お前たちー!」

思わずシグナムは突っ込んだ。

-
數十分後

シグナム「とりあえず落ち着いたか？青年」

映司「はい、すいません取り乱しちゃって、えっとあなたは？」

シグナム「私は、：ツ！？」

ガキインツ！！

その時、なんの前触れもなく報告にあった未確認生物が襲ってきた！
シグナムはギリギリのところでガードした。

シグナム「まつたく…こそなりだな！」

ヴィータ「こいつが未確認か！おいでこのへんな格好の男…死にた
くなかつたらはやく逃げろ！」

映司「へんな格好つて…、こいつか！あれつて…『ヤマリ』！？」
そう、報告にあった未確認生物とこいつのはまさに『ヤマリ』の事で
あつた。

ヴィータがグラーフアイゼンを構えて戦闘体制を整えていた…

？？？「ビ！」見てこる…

ヴィータ「ッな…？」

ガキン…

なんともう一體のヤマリも現れた！

ヴィータ「おー…もう一體なんて聞いてないぞー！？」

シグナム「くそッ…思つていた以上にこい、このまま長期戦に」
よけ…「ッ！？」

ヤマリ「お前達の強さを、よこせ…」

映司「このままじゃまずい！でもどうすれば…？」

その時、映司のポケットに違和感があった。

映司「な、もしかして？」

ポケットを探ると、そこには
黄色のメダルと、緑のメダルと、

… 割れたはずのタカメダルがあった。

映司「なんで…？」

だがその時ヴィータと交戦していたヤミーが映司に襲いかかった！

ヴィータ「なーしまつ…」

ヤミー『よしやん…』

映司「ツ…」

映司はギリギリのところ交わし…

シグナム「貴様なにしてるー？はやく逃げ…」

オーズドライバーを腰に巻き付けメダルをセットし…

ヴィータ「ツー？」

メダルをスキヤンする…

映司「変身ツー！」

『タ力！ トラ！ バッタ！
タ・ト・バ！ タトバ！タツ！トツ！バツ！』

シグナム「な、なんだあれは…！？」

ヤミー『オーズ…オーズウツ！…！』

今、ミッドチルダに
『仮面ライダー オーズ』が復活した。

003話 謎の声と機動6課と新たなグリード

ヴィータ「なんだ？ 一体何が起きてるんだ！？」

ヴィータが驚いているのも無理もない。

なにせいきなり未確認が現れて、戦闘になり、もう一体未確認が現れ、自分を小馬鹿にした（と思つてゐる）変な格好をした青年が変な歌を流して上下三色の怪人？になつたからである。

これにはさすがにシグナムも驚きを隠しきれない。

オーズ「変身できた……よし、いくぞ！」

オーズはアーラクローを開いて……

ジャキンッ！

ヤニー『グアアツー』

ヤニーのお腹を切り裂いて、断末魔をあげ
その場に転がり回つた！

お腹からセルメダルが大量にでてきた！

オーズ「やつぱり、ここにアリヤニーだ！でもなんで？グリードなら全員……」

ヤニー『なによぞ見してやがる！』

倒れたヤミーが再び襲いかかって、

ド「オ！」

オーズ「うわあッ！？」

不意討ちをくらひ、トラームのパワーが出せなくなってしまった。

オーズ「うわあー！トラメダルさん」「みんなさーーー、ど、どひすれば？」

その時、ビニからか…

『…いじ、映司…これ使え…』

オーズ「い、今の声、どつかで…つ痛た！」

空から突然『コラメダル』が降ってきた。

オーズ「コラのメダル！？さつきからわけわかんない事ばつかだけど、これなら…」

オーズは中央のメダルを変えて、再びオースキャナーでスキヤンする！

『タカ！　ゴワラ！　バッタ！』

オーズはタトバコンボからタカゴリバへ
亜種チエンジをした。

ヴィータ「腕の形状が変わった！？」

ヤミー『くそ！なぜこの世界にオーズがあ！？』

オーズ「はああ…セイヤー…！」

オーズはゴリバゴーンを射出し…

ヤミー『グワアアアツ！…！…！…！』

ドゴンッ！

ゴリバゴーンに当たったヤミーはその場で爆発し、大量のセルメダルを撒き散らした。

その頃シグナムは…

シグナム「ふつ、最初はどうなることかと思ったが、なんだ、攻撃もワンパターんで力だけではないか」

ヤミー『この女、強い！その力、欲しいい！…』

シグナム「終わらしてやる、レヴァンティン・ロードカー・トリッジ
！」

ガシャコンッ！

ヤミー『な、なにい！？』

シグナム「紫電…一閃！…！」

ヤミー『グワアアアツ…！…！』
ド「オソンツ…！…！』

ヤミーはシグナムの一撃により、爆発し、大量のセルメダルを撒き散らした。

シグナム「なんだ」これは？「イン？、いや、メダルか？」

とつあえず一段落し、シグナムはオーズとヴィータに合流した。

ヴィータ「おい…えつと、タトバ…！」

オーズ「違うよッ…」の姿は『オーズ』っていうんだ。』

ヴィータ「じゃあさつきのタトバの歌はなんだ？自分の名前を歌つてたんじゃなかつたのか…？」

オーズ「歌は気にしなくていいよ…」

ヴィータ「気にならないほうがおかしいだろうが……」

シグナム「いい加減にしろ！ヴィータ！…」

ポカッ！

ヴィータ「いつてホー…グスツ」

シグナム「うちのヴィータがすまなかつた、とりあえず、なんだ、それを脱いではくれぬか？」

オーズ「ああ、そうですね、わかりました！」

オーズは变身を解除し、人間の姿になった。

シグナム「色々と質問したいのだが、まずお互いの自己紹介から始めよう、私の名は『シグナム』古代遺物管理部機動6課ライトーング分隊の副隊長だ」

映司「俺は『火野 映司』つていいます！それでさつきの姿は『オーズ』つていう、えつと、正義の味方つてやつかな？」

シグナム「『火野 映司』か、さつきは助かった、礼を言つて、火野」

映司「いえいえ、これは…『おいッ』ツー？」

ヴィータ「さつきからシカトしてんじゃねえ！私には聞かないのか！？」

映司「ああ、『めん！えつと、お名前はなんていうんだい？』

ヴィータ「私はヴィータ、機動6課スタートーズ分隊の副隊長だ。」

映司「ヴィータちゃんかあ、かわいいお名前だね」

ヴィータ「お前絶対子供扱いしてんだろ!」

シグナム「まあ落ち着け、ヴィータ。…火野、いきなりで悪いが色々と聞きたいことがある、私達の隊舎までついてきてくれないか?」

映司「はい、いいですよ。もともといく宛もないし、俺が今、どこにいるかさえもわからないし…」

シグナム「すまない、今すぐ迎えのへりを呼ぶ」

映司（それにしてもわつきの声、いつたい…）

・ヘルコプター内・

ヴィータ「映司」

映司「なに? ヴィータちゃん」

ヴィータ「お前は私が殺す」

映司「ツなんで！？」

シグナム（こいつら、見てて飽きないな…）

- 機動6課 部隊長室 -

一人、落ち着かない人間がいた。

はやて「…………。」

リイン「はやてちゃん、さつきからペンで机叩くのつむかうですぅ」「

はやて「だつてなあ…、リイン、さつきヴィータから連絡あつたん
やけどなあ、『未確認』匹で、変な格好したやつも現れて、タト
バ歌つてセイヤーして片付いたから映司つれてそつち帰るぞー』つ
て、…状況わかる？リイン？」

リイン「ヴィ、ヴィータちゃんには、なにも悪気はないんですよー。」

はやて「まあその『映司』って人も気になるなあ、もしかしたら未
確認についてなにか知ってるかもしけんな」

リイン「あ、着いたみたいですよ！」

ヴィーン

ドアが開く。

シグナム「主、はやて、ただいま戻りました」

ヴィータ「はやて、もどったぜえー！」

映司「い、いんにちわ～」

はやて「ほな、お疲れさんな。：あなたが映司さん？」

映司「は、はい！火野 映司です！」

はやて「そんな硬くなんなくてええよ、私の名前は『八神 はやて』よろしくな、映司くん！」

映司「そうだね…、よろしくーはやてちゃんー！」

それから小一時間、お互のこと、世界の情勢のこと、オーズのこと、魔法文化のことなど話合つた。

映司「知らなかつたなあ、本当に魔法があるなんてーはやてちゃんなんか魔法みせてよー！」

はやて「多分映司くんの想像してる魔法とはかなり違うとおもうわ…てか、映司くんのその『オーズドライバー』ってデバイスとはまた違うんか？」

映司「うーん…近くて、遠いのかなあ？」

そんな話もしつつ、

はやて「あ、忘れてたわー映司くん、あの未確認生物についてなに

か知つとる」とある?」

映司「えっとね…、簡単に説明するよ」

その場の空気が重くなりつつ、映司は口を開いた。

映司「あれば、『ヤミー』っていう、人の『欲望』をエサにする怪物なんだ。」

はやて「欲望?」

映司「うん、いっぱい食べたいとか、お金持ちになりたいとか、綺麗になりたいとか、そんな人の欲望をエサにするんだ」

シグナム「つまり、ヤミーが生きていくには人の欲望が不可欠、といふことは、その親は人間ということなのか?」

映司「察しが良いですね、シグナムさん、その通りです。」

はやて「でも、そのヤミーってどうやって生まれるん?」

映司「大事なのはそこなんだ、はやてちゃん。そのヤミーを生み出す上位に位置する者がいるんだ、それが、『グリード』」

はやて「グリード…」

ヴィータ「つまりその『グリード』がいるかぎりヤミーは生まれ続けるってことか」

映司「でも、おかしいんだ、グリードはもう全員消滅したはずなんだ」

はやて「ここには、映司くんも知らないグリードがこのミッドチルダに存在してることか、はあ、一件落着と思つたけど、そういうわけにもいかないようやなあ」

映司（俺の知らないグリード…、ティケイドさん、これが俺がこのミッドチルダでやらなければいけない問題なんですか？）

・とある洞窟にて・

？？？「あれぐらいの人間の欲望では、まだこの程度のヤミーしか生まれないか、まあいい、まさかオーブがこの世界にやつてくるとはなあ、おもしろい」

？？？は洞窟をでて、空を見上げる。

？？？「邪魔はさせんぞ、オーブ。俺は必ずこのミッドチルダでやつてやる……！」

世界の、終焉を……。」「

ついに謎のグリードが動きだす…。

004話 隊長陣とフオワードと新たなヤミー

ヤミーとグリードに会って話会った後、

はやて「と、いつ」とで、グリードを退治するまで映司くんを民間協力者として立ち位置になるんやけど、ホントにええんか?」「

映司「うん、もともとグリード退治は俺の分野だからね、それに人は助け合つて生き物でしょ…」

はやて「うん、ありがとうな、映司くん…そつやーせつかくだから映司くんにうちの部隊のメンバー紹介するわー」

ちゅうじゅうじゅうだつたため、食堂に皆集まつていた。

はやて「なのはちゃん! フロイトちゃん!」

なのは「あ、はやてちゃん! お疲れ様!」

フロイト「はやて、そちらの方は?」

はやて「紹介するわ、この人は『火野 映司』くんや、私となのはちゃんと同じ地球出身やー…」

映司はなのはに頭を下げる。

映司「どいつも、はじめまして、『火野 映司』です…よろしく、なのはちゃん!」

なのは「よろしくね、映同くんー！」

そして、フロイトにも頭を下げるつとするが……

映司「あ、ああ……」

フエイト「ど、どうしたのかな？映司？」

「なん? えー、じく〜ん?」

映司（な、なんだこの胸の痛み！？た、たしか前にもこんな事あつたような！？フエ、フエイトさん、すごく美人だな、だ、駄目だ、ま、まともに話せない！！久しづりの『ラブツ！ ラブツ！ ラブウウウ！！！』）

今、映画の心の中で、『ラブ・ラブ・ラブ・ラブ・ラブ』に「ラブ・ラブ・ラブ・ラブ・ラブ」にならう。

はやて「あ、駄目や、完全にフュイドちやんに田えいとる」

フヒト「？」

映司「あ、え、映司でしょ！よろしくお願ひします！フロイトさん！」

年下なのになぜか敬語になってしまった映司だった。

そして、次のテーブルに向かうとなれば達より更に若い四人が座っていた。

その中の内、青いショートヘアの女の子がいきなり映司に話しかけてきた。

スバル「こんにちわ、映司さん…わたくし部隊長室通りすがりのとき、全部映司さんのこと聞いちゃいました！変わったデバイス持つてるんですね！？ぜひ、今、機動させて…『ポカツ！』…痛で、なにすんの～ティア～」

ティアナ「なに盗み聞きしたこと普通に話しかやつてんのよ！バカスバル！…すいません、映司さん、怒つてません？」

映司「大丈夫だよ、スバルちゃんにティアちゃん、こんど機会あつたら見せてあげるから、ね？」

スバル「ホントですか！？やつたあ…………」

ティアナ「全く、救いようのないバカね……」

エリオ「ついに、ついにまともな男の人気が身近に……」

キヤロ「良かつたね！エリオくん！」

映司はエリオとキャロの一人を見ながらふと思つた。いくら成人年齢が低いとはいえ、

子供が前線に立つて戦うことにはあまりいい気はしなかつた。

映司（この子達は自分の意志で戦つてゐる、俺がなにかしても恐らくこの子達の考えは変わらないだらうな、でも、あんまりいい気はしないかな）

映司「エリオくんにキャロちゃんだね、よろしく…」

エリオ& am p; キャロ「はい！」

はやて「それと、映司くんにはまだ紹介してなかつたけど、ヴォルケンリッターにはまだあと二人いるんよ」

映司ははやてと一緒に医務室に寄つた。

シャマル「あら、はやてちゃん…それに、あなたが映司くんね」

映司「はい、これから少しの間、よろしくお願ひします…えつとザフイーラさんも、よろしくお願ひします！」

ザフイーラ「……。」

シャマル「ザフイーラはちょっと人見知りだからねえ、『めんなさい…でも大丈夫！すぐ仲良くなれるわ！』

映司「はい！」

そして一段落した……

- 隊舎 廊下 -

はやて「わざわざ映司くん、なにか生活で必要なものあるか?」

映司「大丈夫!俺はちよつとの小銭と明日のば……ない」

はやて「?」

映司「ない、ない!ない!」

はやて「どないした?映司くん!?」

映司「明日のパンツがない……!…………!」

映司はフロイドの時以上にものすくべタンパつていた。

はやて「明日のパンツ!あ!もしかしてこれが!?」

それは、今朝リインが拾ってくれた映司のパンツだった。

はやて(てか、これ映司くんのパンツやつたんか)「『あ、あ、』
『ん?』

映司「ありがとおおおお……!」

映司ははやてを抱き締めてしまつた

思わず はやて は赤面になり……

映司「な、なんで、俺、なにかしたあ？」ドタツ。

一方その頃

市民「た、助けて、俺が、いつたい、何したって…」

ヤミー』よこせ、お前の力、よこせH-.-.-.-.』

また、あらたな事件が起っていた…。

うーん、パンツのべだつとフローリーのべだつは蛇足だつたかなあー
。：

映司は機動6課に居候することになった。

次の日の早朝：

ティアナ「さて、今日の朝練もはつきつていぐか…って…え、映司さん？なにしてるんですか？」

映司「あ、ティアちゃん、おはよウー。」

そこにいたのは、掃除婦の格好をして掃除をしている映司だった。

ティア「別に民間協力者だからそこまでしなくても…」

映司「でも、だからって何もしないわけにはいかないし、それに俺はこういう仕事好きだから！」

ティア（映司さんつてホントにお人好しなのね。）

それから少し時間がたち、ちょうど朝食の時間になつた頃、映司はフォワード達と朝食をとつていた時、シグナムが深刻な顔をして話しかけてきた。

シグナム「火野、食事中悪いが、ちょっとブリーフィングルームまで来てくれないか？」

映司「え？はい、（もしかしてまたヤミー？）」

・ブリーフィングルーム・

そこには はやて ヒヴォルケンリッター達が集合していた。

はやて「すまんな、映司くん、まあだいたい状況はわかるやう

映司「うん、またヤミーが現れたんだね」

はやて「せや、今日の朝方、管理局地上本部付近にて、Aランク魔導師一人の死体が発見された。死体の状況から見て、間違いなくヤミーの仕業や」

ヴィータ「死亡推定時刻は、だいたい昨日の夜つてことは…」

シャマル「Aランク魔導師がやられたつてことは…」

ザフィーラ「ああ、この前よりパワーが上がってるヤミーといづこだな」

シグナム「だが、ヤミーの動きがまったく掴めんな、一体何が目的なんだ?」

映司「うーん…、つーりインちゃん!…」

映司が突然大声をだし、周りは驚いた。

リイン「な、なんですか?」

映司「今まで襲われた人達の職種ってわかるーーー？」

リイン「えっと……、全員管理局の職員ですーーー！」

映司「たしか魔導師には『ランク』ってのがあるんだよねーーー？皆のランクはーーー？」

リイン「えっとですねーーー、これって……ッ！」

はやて「なんや、リインーーー？」

リイン「皆、Aランク以上ですーーー！」

シグナム「そ、うか、ヤミーが狙つてるのは魔導師ランクが高い職員を狙つているのか！」

ヴィータ「あの時のヤミーは『力よこせ』って言つていたけど、また同じ人間のヤミーってことか？何匹連れてるんだ？」

はやて「なるほどなあ、せやけど次襲われるAランク魔導師なんて特定できんnaあ、いつぱいおるし……」

映司「大丈夫だよ、はやてちゃんーーー！」

映司は確信のついた表情で、再びリインに質問した。

映司「最近地上本部で、急激にランクが上がっている、魔導師っていいないーーー？」

リインはパソコンで調べると…

リイン「いました！ついこの前までランクだつた魔導師が、A+まで上がつてます！…これは…地上本部の警備員です！…」

ヴィータ「間違いない！そいつがヤミーの親だ！」

はやて「まさに『灯台もと暗し』か…、よし…今日はヴィータと私と映司くんの3人で出撃します…シグナムとシャマルとザフイーラは待機や！」

全員「了解！」

・時空管理局地上本部 地下駐車場・

そこに、一人でブツブツ喋りながら循環警備をしている警備員がいた。

警備員「ははは、最初あの化け物を使って人殺してしまった時は恐ろしすぎて、数ヶ月は使う事できなかつたが、慣れてしまえば、なんとも思わないな！もう少しで、もう少しで直属の局員になれる…ツ…そうだ…別に俺が殺してる訳じゃない…全部あの化け物がやつた事なんだ！俺は誰も殺してなんかない…！…ははは…！」

「！」

はやて「いや、あんたが殺したんや

警備員「だ、誰だッ！？」

警備員が後ろを振り向くと、
そこには、はやて とヴィータと
映司が立っていた！

はやて「遂に見つけたで！連続殺人事件の容疑者として、あんたを
逮捕します！」

はやての関西混じりの声が、その場に響きわたった！

警備員「俺が殺人？ははッ！殺したのは俺じゃない！あの化け物だ
！」

ヴィータ「ふざけんじゃねえ！お前の欲望が、何も罪のない魔導師
を殺したんだ……！」

警備員「さつきからゴチャゴチャと…おい、化け物…出てこ…！」

シユタツ！

その場にさきなりヤミーが現れた！

警備員「化け物…そいつらをやつちまえ…！」

ヤミーが戦闘体制に入る！

映司「やつぱり、じつこつ展開になるんだね」

はやて「ヴィータ、映司くん、いくでえツ！」

ヴィータ「おうーはやて！」

映司「うん！」

映司はオーズドライバーを腰に巻き付け、
メダルをセットし、はやて とヴィータは
デバイスを取り出す！

はやて・ヴィータ「セット、アップ！…！」

映司「変身ツ！…！」

『 standby Ready 』

『 タカ！ トラ！ バッタ！

タツ！トツ！バツ！タトバ！タツ！トツ！バツ！…』

はやて とヴィータは騎手甲冑を身に付け、
映司はオーズへと変身した。

オーズ「いくぞ！ハツ！セイヤツ！」

オーズはヤミーにトラクロード引き裂き、
ヤミーが苦しんだところに…

ヴィータ「はあああッ！」

ドゴォオッ！

ヴィータのグーラーファイゼンがヒットする！

ヤミー『グアアアツ！…』

オーズ（すじいな、パワーだつたらゴコラームぐらこあるな…）

ズガガガガガツ！

そこから はやて の複数の魔法弾がヤミーに当たる！

はやて「じや？…なのはちやんお得意の『アクセル・シユーターの威力は！？』」

オーズ「凄いよ、はやてちやん！…よし、俺も負けてられないな！」

オーズはバッタレッグでヤミーを複数回蹴りつける！

ドゴォオッ！

ヤミー『ガアアツ！』

ヴィータ「これでお前も、おしまいだな！警備員…！」

警備員「く、くそお…おい、化け物！何をしてでも奴らを殺せ！」

その時、ヤミーの動きが止まる。

ヤミー『なにをしてでも…いいんだな?』

警備員「ああ…とこかく奴らを殺すんだあ…」

ヤミー『それで…』

ヤミーが警備員に叫び…

オーズ「…ッな!?」

ヤミー『お前の力を、よせ…』

ヤミーは警備員を補食し始める…

警備員「や、やめひよッ…お、俺は…ただ、魔導師に、なり、たく…ギヤアアアツ…!…!」

バキバキ、ゴキ…

ヤミー『ふつ、じあそいつせ』

はやて「自分の親を…これがヤミー……」

ヴィータ「許せねえ……へりへー……」

ヴィータが再びグラーフアイゼンで殴りかかるが…

ガシイツ！

ヴィータ「なにツーうわあツー……」

ヤミーは前よりパワーアップし、グラーフアイゼンを受け止め、ヴィータは自分に叩きつけられた。

はやて「ヴィータ……！」

『タカ！　ゴリラ！　バッタ！』

オーズ「つまおおツー！」

オーズはタカゴリバに亞種チョンジし、ヤミーに殴りかかるが…

ヤミー『ふん、効かんな…』

オーズ「うそー？ぐわあツー！」

オーズはヤミーに投げ飛ばされ、壁に叩きつけられた。

ヤミー『じりじり流石にキツイ、場所を変えよつ。』

そつまつて、ヤミーは外に飛び出していった。

はやて「まで！逃がせへん！」

ヴィータ「くそ、待ちやがれ！」

二人は飛行魔法を使い、飛び出していくが、

オーズ「わああッ！？ちょっと皆まつてえ…！」

オーズはただ1人走つて追いかけていた。

オーズ「はあ…、はあ…、チーターのメダルかクジャクのメダルあ
ればいいんだけどなあ」

しかし走つていると、駐車場の入口付近に…

オーズ「はあ…、…ん？、ツああああッ！…！」

なんとそこには、あの自販機、『ライドベンダー』があつた…！

オーズ「なんでミッドチルダに！？もしかして、ディケイドさんかな
！？まあいいや！使わしていただきます！」

セルメダルを投入し、真ん中のスイッチを押して、バイクモードに
変形させた！

オーズ「よし、決着を着けてやる！」

オーズはアクセルを握り、猛スピードをだして、ヤミーを追いかけ
ていった。

006話 決着と解決と消えない欲望

ヤミーは地上本部から少し離れた海岸沿いにいた。

それを追いかけてきた はやて とヴィータも今、到着した。

はやて「ああ、こへでえ、ヤミー。」

ヤミー『ふん！お前みたいな小娘に、なにが…
ドゴオオオンッ！…！』

しかし次の瞬間！高濃度の魔力砲がヤミーに直撃した！…！

ヤミー『グワアアアッ！…！…！』、小娘えええ…！…！

はやて「私はな、この世界でまちよつとはな知れた魔導師なんよ
！…あ、どんどんいくでえ！…！』

はやて は、ショベルクロイツに魔力を収束する…！…！

キイイイイイイイインッ…！…

ヴィータ「はやてーその技つて…！」

はやて「デイバイイイインッ…！」

ヤミー『ツー？』

シユベルトクロイツから収束砲が発射される！！

ドゴオオオオオーンツツ！－！－！

ヤマハは数十メートル吹き飛んだ！

「ハヤニタ・すけえサ!! ほおび!! や!!」=を吹き飛はした!!

はやで、よし これで少しは……スハツ!!』『……?』

次の瞬間
ヤミーかはやでの左手を爪で引いていた

卷之三

「外」はやで

だがヤマモ虫の息だった。

ヤニー』はあ……、あ……、流石にわざるのは効いたぞ、小娘、ぶつ殺してやるー。』

ヴィータ（くそ、いざとなつたら本氣で…ツ！？）

ヴォオオオオオン！

遠くからバイクの音が響き、

『タカ！　トヲ！　バツタ！

タツ！トツ！バツ！タトバ！タツ！トツ！バツ！！』

やつて来たのは再びタトバコンボにコンボチョンジしたオーズだつた！

ヤミー『グワアアアツー』

オーズはライドベンダーでヤミーに体当たりし、そのまま はやてとヴィータのもとへ向かつた。

オーズ「はあ～やつと追い付いた、つて、はやてちゃん！大丈夫！？」

はやて「うん、大丈夫、問題あらへ…ツく…」

左手からは血が流れ続けていた。

ヴィータ「まつてろ！はやて！今シャマルを呼ぶからー。」

オーズ「大丈夫、落ち着いて、はやてちゃん、ヴィータちゃん、二
人とも俺が絶対守るから！」

オーズは再びライドベンダーに乗り、ヤミーに突っ込んでいく！

はやて・ヴィータ「映司…」

ヤミー『くわおおツ！オーズウウツ…』

オーズ「ぐりええええツ！……！」

オーズはライドベンダーを飛び降りそのままヤミーにぶつけた。

ヤミー「はあ……はあ……くそおおツ！……！」

そしてオーズはオースキャナーで、再スキヤナンする！

『スキヤニングチャージ！……』

オーズ「はあアアアアアアツ！！」

ヤミー『ツー？』

オーズの『タトバキック』が炸裂する！

オーズ『セイヤアアアアアアツ！……！』

ヤミー『グワアアアアアアツ！……！』

ドゴオオオオンツ！……！

ヤミーは大爆発し、大量のセルメダルが飛び散る！

オーズ「はあ……はあ……は、始めてこの技をまったくも……」

その後、管理局局員が集まり、事件の後始末をしていった。はやてはシャマルにより治癒魔法をかけられており、ヴィータと映司は夕陽が映る海辺を歩いていた。

ヴィータ「なあ、映司」

映司「ん? 何?」

ヴィータ「映司は、こんな事件沢山みてきたのか?」

映司「…うん、数え切れないほど、ね」

ヴィータ「欲望って、無くならないもんなんのかなあ…」

映司「残念だけど、それは無理なんだよ、欲望っていうのは生きる者全てに存在するからね、…でも欲望があることは悪いことばかりじゃないんだよ」

ヴィータ「?」

映司「人は欲望によつて成長したり、学習したりしていける生き者なんだ、そこから過ちに気付く」ともできるし、生き甲斐を見つけることだってできる」

「ヴィータ」… そつか、お前もたまには良こと聞ひにやねえか！」

映司「ちよつとおーそれどうこう意味なんだー？」

「ヴィータ」や、まやく はじのとこ、帰るつぱー…」

映司「うさ、そだねー行ひー、ヴィータやひーんー」

「ヴィータ」だから、ヴィータ『さちひ』『さみせー』

映司とビィータは治癒を受けてこのままで のまへと歸つて
つた。

006話 決着と解決と消えない欲望（後書き）

とうあえず一段落、最後うまくかけなかつたなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7376z/>

ooo after ~夜天の主と欲望の王~

2011年12月25日16時49分発行